様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　２ 年　 ７ 月　 ８ 日現在

機関番号：３４３１４
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2016～2019
課題番号：１６Ｋ１２２５７

研究課題名（和文）男性家族介護者の介護負担軽減と虐待防止支援プログラム開発

研究課題名（英文）Development of a program to reduce the burden of care for male family caregivers and prevent abuse

研究代表者
植村　小夜子（UEMURA, SAYOKO）

佛教大学・保健医療技術学部・教授

研究者番号：１０３４２１４８

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,200,000円

研究成果の概要（和文）：男性家族介護者の特性・ニーズを明らかにし,介護負担軽減と虐待防止支援プログラムを開発することを目的とした．その結果,夫は,年を重ねた夫婦の絆が在宅で介護を続ける強みであった．息子は,親子の愛情を根底に介護を始め,当初は介護方法に戸惑い負担が生じていること,解決しようと学習して自分のペースを守りたい思いが強くなることが明らかになった．したがって,支援に際しては介護開始当初は介護方法支援を目的とした介入が重要で,介護に慣れてきた段階は,介護に完璧さを求めすぎないように定期的に支援する必要があることが示唆された.

研究成果の学術的意義や社会的意義
プログラムの開発の完成に向けては,男性が介護することに張り詰め,頑張りすぎないような支援,介護度の高い被介護者を介護している介護者には,特に自身のための時間と,休息や気晴らしの時間を確保できる支援体制を検討する必要がある．年齢が若く,同性を介護する男性は，ストレス対処能力が低く,がっかりした思いで介護する傾向があるため,虐待防止の観点からも特に支援を充実させる必要がある.
開発の完成に向けては,介護負担の軽減，個別事例への具体的な対策の検討を重ね,質的,量的調査の両側面から一般化できる対策について検討していくことが,男性介護者の負担感軽減,ストレス緩和,虐待防止につながると考えられる.

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study was to clarify the characteristics and needs of male family caregivers from a qualitative and quantitative analysis of male family caregivers, and to develop a care support and abuse prevention support program for them. As a result, the elderly husband's bond with the wife became an advantage to continue caring at home. The son, who started nursing care based on his affection for his parents, was initially confused and burdened with the care method. However by learning to solve it, he became more motivated to keep his pace. Therefore, it is suggested that the intervention is an intervention for the purpose of helping to learn the care method at the beginning of the care, and at the stage of becoming accustomed to the care, the support should be done regularly so that perfection is not required for the care.

研究分野：在宅看護学

キーワード：男性家族介護者　介護負担感　ストレス対処能力　虐待防止

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。

様　式　Ｃ－１９,Ｆ－１９－１,Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

今世紀には我々がみたことのないスピードで高齢者介護の負担が発生する,いわゆる介護の危機が到来する．ゆえにその準備を整えることが焦眉の急である．たとえば,加齢に伴う認知症,慢性疾病や心身障害など,長期的なケアが必要な高齢者の増加とともに家族介護者の数の増加をも伴う．つまり高齢者に対するケアは多くの場合,まずは家族介護者に大きな負担をかける現状である．これまでの家族介護に関する研究の中で Zarit らにより介護者の負担感を測るスケールが開発され,さらには介護を肯定的にとらえる満足感や介護者の健康状態に関する分析などがされている(Lawton, M.P. Kleban,1989)．また,介護者の認識や受容に関する質的な分析もされている（Ekwall,A.K ら,2007・Wilson-Genderson ら,2009)．とはいえ,これまでの研究では性別を問わず家族介護者として分析されたものが多い（Lutz, B.J, 2011; Davis, L.L, 2011)．実態として,これまでの支援策は女性を主な対象としたものになっている．

我が国は,超高齢社会に突入し,疾病を抱え介護を必要とする高齢者が増大している．さらに,世帯の縮小化が進行する中,男性が介護を担う割合が年々増加している．最新の統計では男性が 31.3%,女性が 68.7%になっている(国民生活基礎調査,2013)．これまでの研究から男性家族介護者はサポートを積極的に求めない傾向があり周囲の人にあまり積極的な支援要請を行わない(津止,斎藤,2007)ことがわかっている．また,虐待の比率では夫と息子によるのが 61.3%（10802/17614 人）と高い（平成 27 年度高齢者虐待対応状況調査,2017)．また,虐待発生要因の上位 2 位は介護疲れ,介護ストレス（25%）,虐待者の障害・疾病,（23.1%）である(老健局高齢者支援課調査結果：2015)．自ら支援を求めてこない男性の特性を踏まえた支援が危急の課題である．男性家族介護者の特徴とニーズを明らかにし,増加傾向にある,男性家族介護者の介護負担の軽減と虐待の防止を図り,心身の健康と生活の質の向上に向けた支援を行うことは喫緊の課題である．

我々は,2014 年に男性家族介護者 27 人に対して質問紙調査と半構成的なインタビュー調査を実施した．在宅で介護している男性についての考察から,彼らは気分転換をはかれる時間を持ち介護に関する制度を上手く利用して,ストレスに対処し介護負担を軽減させていると推察された．その一方で,介護へのこだわりが行き過ぎて虐待につながる可能性を考慮した支援がいること,サポートを積極的に求めない男性家族介護者には介護者会を企画する時には工夫がいること等が示唆された（S.Uemura ら,2014)．

2015 年には,男性家族介護者会に参加している人に対する調査を行い,男性家族介護者会への参加動機や介護会の運営実態に関する調査も実施している．

しかしながら,男性に焦点を当て,介護負担や虐待に関する質的・量的な研究は未だ少なく課題として残され,彼らの現状を踏まえた対策も不足している．看護分野からの男性家族介護者への介護負担軽減と虐待防止支援プログラムは未開発である．

本研究を実施することにより

(1)男性家族介護者の介護負担の軽減と男性による高齢者虐待の防止につながる

(2)男性家族介護者の心身の健康保持に寄与できる

(3)地域で支援する人が男性家族介護者の特徴に配慮した支援が行える

(4)その成果は,在宅家族介護者および在宅療養者の生活の質の向上に寄与できる

(5)QOL に配慮した在宅介護支援の可能性が広がる等,今後,男性家族介護者支援を行う上で本研究の意義は大きいと考える．

２．研究の目的

本研究の目的は,男性家族介護者に関する質的・量的分析から男性家族介護者の特性・ニーズを明らかにし,彼らの介護負担軽減と虐待防止支援プログラムを開発することである．

３．研究の方法

(1)質的分析を主とした介護の特徴とニーズの明確化

介護負担軽減と虐待防止支援にむけ,男性と女性家族介護者の性別による特徴の共通点と相違点を質的側面から分析して明らかにすることで,支援方法を検討する．そのために在宅で介護している家族介護者の介護状況に関連する聞き取り調査を実施した．

(2)量的分析を主とした介護の特徴とニーズの明確化

質的に明らかにした介護の特徴について性別による共通点と相違点について横断的質問紙調査を実施し,量的な面から分析することで,介護負担軽減と虐待防止支援に関連する緊急性や優先度,また即時対応の必要性の有無等について検討につなげた．

在宅で介護している介護者の負担軽減に向けた支援は重要な課題であることから,介護者の性別に合わせた支援が必要と考え,在宅で介護している男性及び女性家族介護者の介護状況と介護への認識について行った面接調査から得たカテゴリー,サブカテゴリーを基に作成した質問紙を用いて,介護状況と介護への認識について,性別による違いを明らかにすることを目的として調査を行った．その方法として,無作為に抽出した対象に郵送法での自記式質問紙調査を実施した．

介護負担感,ストレス対処能力の性別による実態と特徴を明らかにするため,年齢,続柄,介護年数,1 日の介護時間,睡眠時間等と Zarit 介護負担感尺度日本語版(以下：J-ZBI-8)と Sense of Coherence（以下：SOC_13)との関連から分析した．

４．研究成果

(1)質的分析を主とした介護の特徴とニーズの明確化

介護負担軽減と虐待防止支援にむけ,男性と女性家族介護者の性別による特徴の共通点と相違点を質的側面から分析して明らかにすることで,支援方法を検討するために在宅で介護している家族介護者の介護状況に関連する聞き取り調査を実施した.

①先行研究としては,2014 年３～5 月に 27 人（夫 19 人,息子 7 人,父１人）の男性家族介護者の自宅に訪問し聞き取り調査を実施している．研究の対象となった男性家族介護者は,ストレス対処能力が高いかもしくは主観的健康感で健康状態が良いと感じている場合,介護負担感は軽くなっていた．被介護者の疾患の種類や重症度によって彼らの介護負担感,ストレス対処能力,主観的健康感に差違が認められなかった．また,男性家族介護者 27 人へのインタビューから,彼らの特徴は 4 カテゴリーと 11 サブカテゴリーで構成されていた．そして,男性家族介護者は{介護をまるで仕事のように捉えている}がコアカテゴリーとして抽出された.

4 カテゴリーは【介護方法にこだわりがある】【介護方法は自分で学びとる】【社会で働いていた知恵が介護に活かされている】【先を見越した介護をする】であった．質問紙による分析結果とインタビュー結果と統合すると,彼らは気分転換をはかれる時間を持ち介護に関する制度をうまく利用して,ストレスに対処し介護負担を軽減させていると推察された.

②在宅で妻の介護をしている夫の介護負担感,ストレス対処能力と彼らの介護継続要因について明らかにすることを目的に研究した結果から,彼らの在宅での介護継続要因は,【妻の介護はひとには任せられない】【妻を介護するのは当然のこと】【結局は自分で介護するしかない】【積み重ねた夫婦愛に支えられ介護できる】【妻の感謝に支えられ介護する】のカテゴリーで構成されていた．そして≪年を重ねた夫婦の絆≫がコアカテゴリーとして抽出された．在宅で妻の介護をしている夫は,高齢になっても趣味を楽しむ時間があることや 7～8 時間の睡眠が確保できることが重要な要素であり,長年の生活の中で培われ≪年を重ねた夫婦の絆≫が強みとなり在宅で介護を続ける要因になっていると考えられた.

③在宅で介護している息子家族介護者の介護の特徴は,４つのカテゴリーと９つのサブカテゴリーで構成された.【親子ならではの思い】は３つのサブカテゴリー＜親をみるのは当たり前＞＜親へのあたたかい思い＞＜自分が介護したい＞,【負担感を乗り越え安定する】は,２つのサブカテゴリー＜介護開始当初の負担感＞＜乗り越えて生活が落ち着く＞,【介護に完璧さを求める】は２つのサブカテゴリー＜介護の学習を積み重ねる＞＜介護が完璧になってくる＞,【自分のペースを守る】は２つのサブカテゴリー＜自分のペースを乱されたくない＞＜外部からの支援は負担＞で構成された．親子の愛情を根底に介護を始めたものの,当初は介護方法に戸惑い負担が生じていることが浮き彫りになった．解決しようと自分で学習してその負担感を乗り越えると介護は安定し,さらに学習するためだんだん完璧さを求めるようになり,自分のペースを守りたい思いが強いことが明らかになった．したがって,支援に際しては介護開始当初における介護方法支援を目的とした介入が重要であること,介護に慣れてきた段階においては,介護に完璧さを求めすぎないように定期的に支援する必要があることが示唆された.

④これら男性家族介護者の特徴を明らかにしたうえで,2016 年 8 月～10 月に 29 人（妻 10 人,娘 12 人,嫁 4 人,その他 3 人）の女性家族介護者に男性家族介護者で実施した内容と同様の聞き取り調査を実施した．女性家族介護者 29 人の特徴は,2 つのカテゴリー【女性の柔軟性】【女性の不利益性】で構成された.【女性の柔軟性】のサブカテゴリー＜生きる過程で身につけた対処行動をとる＞＜介護者が優位な関係に変化する＞で構成されていた.【女性の不利益性】のサブカテゴリーは＜女性が介護をするという社会規範が存在する＞＜身体的疲労が精神的負担を増大させる＞＜経済的不安がある＞から構成されていた．この結果からは,女性は日常生活の中に介護を柔軟に取り入れて対処するものの,体力的,経済的には不利な面もあることが特徴として浮き彫りになった．介護は女性がするのが当たり前で男性よりも向いていると考え,介護を受け入れている状況があり,女性は家庭を守るという伝統的な考えが背景にあることが示唆された.

(2)量的分析を主とした介護の特徴とニーズの明確化

質的に明らかにした介護の特徴について性別による共通点と相違点について横断的質問紙調査を実施し,量的な面から分析することで,介護負担軽減と虐待防止支援に関連する緊急性や優先度,また即時対応の必要性の有無等について検討につなげた.

①要介護者を在宅で介護をする家族介護者 60 人(男性：31 人,女性：29 人)の介護負担感,ストレス対処能力の性別による実態と特徴を明らかにするため,年齢,続柄,介護年数,1 日の介護時間,睡眠時間等と Zarit 介護負担感尺度日本語版(以下：J-ZBI-8)と Sense of Coherence (以下：SOC_13)との関連から分析した結果,男性家族介護者のほうが女性家族介護者より高齢であり,1 日の介護に関わる平均時間が 9 時間でそばに付き添っている時間が長いこと,女性に比べ介護を始めることでこれまでの生活ができなくなったことによって生じる負担感が高いことが明らかになった．その一方で,男性はストレス対処能力が女性より高いことも明らかになった.

②在宅で介護している介護者の負担軽減に向けた支援は重要な課題であることから,介護者の性別に合わせた支援が必要と考え,在宅で介護している男性及び女性家族介護者の介護状況と介護への認識について行った面接調査から得たカテゴリー,サブカテゴリーを基に作成した質問紙を用いて,介護状況と介護への認識について,性別による違いを明らかにすることを目的として調査を行った結果から，女性は経験を活かして介護を担うが,疲労が精神的な負担に繋がると認識していた．男性は介護を人に任せられずその大変さを人に知られたくないと認識しており,男

性は,孤立する可能性が示唆された.

③男性家族介護者の介護負担感に与える影響要因を明らかにすることは,男性家族介護者の特徴・ニーズ,更にその支援の緊急性や優先度を基に介護負担の軽減,虐待防止支援プログラムを開発上で重要であると考えた．そこでZarit 介護負担感尺度日本語版（以下：J-ZBI-8）の質問紙調査を用いて介護負担感の特徴を年齢,続柄,介護年数,1 日の介護時間,睡眠時間等の関連から明らかにした結果から,被介護者に対して多くの援助が必要な状況では,介護者の負担感は高く,いらだちや自分の行動制限を感じていた．適度な睡眠時間や趣味があることは,介護負担感を減少させる傾向があり,介護者の休息や気晴らしの時間を確保することの大切さが示唆された.介護度の高い被介護者を介護している場合は特に介護者自身のための時間が確保できるような支援が重要であると考えられる.

④Sense of Coherence（以下：SOC_13)の質問紙調査を用いて介護負担感とストレス対処能力の特徴を年齢,続柄,介護年数,1 日の介護時間,睡眠時間等の関連から④Sense of Coherence（以下：SOC_13)の質問紙調査を用いて介護負担感とストレス対処能力の特徴を年齢,続柄,介護年数,1 日の介護時間,睡眠時間等の関連から検討した結果,若い男性家族介護者は,ストレスに対する対処能力は低い傾向にあることが示唆された．男性が同性を介護する比率は低かったが男性の被介護者を介護する時の方が,ストレス対処能力が低い傾向がみられた．年齢が若く,同性を介護している男性家族介護者に対しては,特に支援を充実させる必要があると考えられた.

(3)これまでの質的・量的調査と分析で明らかになった男性家族介護者の特徴・ニーズ

質的・量的調査と分析で明らかになった男性家族介護者の特徴・ニーズ，更にその支援の緊急性や優先度を基に男性家族介護者の介護負担の軽減,被介護者への虐待防止支援プログラムを開発することの意義は大きいと考える．介護負担の軽減,被介護者への虐待防止支援プログラムを開発することによって,地域で支援する人が男性家族介護者の特徴に配慮した支援が行え,在宅生活を送る在宅療養者および在宅家族介護者のQOL に配慮した在宅介護支援の可能性が広がる.それによって,男性家族介護者の心身の健康保持に寄与でき,在宅療養者および在宅家族介護者のQOL の向上に寄与できる.

明らかになった男性家族介護者の特徴・ニーズは

① 男性の介護する対象は,ほとんどが妻か母親である.
② 男性は,比較的高齢になってからも介護を担っている.
③ 男性は,認知症の妻の介護をする場合が最も多い.
④ 1 日の介護に関わる平均時間が 10 時間と長い.
⑤ 高齢になればなるほど在宅でそばに付き添っている時間が長い.
⑥ 7～8 時間の睡眠が確保できることが重要な要素である.
⑦ 在宅介護を継続している夫は,高齢になっても趣味を楽しむ時間をもっている.
⑧ 被介護者の認知機能の低下で,その行動に困惑したり腹が立ったりする傾向がある.
⑨ 女性に比べて介護を他人に任せようとは思わず,一人で介護しようとする.
⑩ 女性に比べ介護を始めることでこれまでの生活ができなくなったことによって生じる負担感が高い.
⑪ 男性は,その大変さを人に知られたくないと認識し孤立する可能性がある.
⑫ 被介護者に対して多くの援助が必要な状況では,介護者の負担感は高く,いらだちや自分の行動制限を感じている.
⑬ 男性は,ストレス対処能力が高いかもしくは主観的健康感で健康状態が良いと感じている場合は,介護負担感が軽い.
⑭ 気分転換をはかれる時間を持ち介護に関する制度をうまく利用することでストレスに対処し介護負担を軽減させている.
⑮ 男性が男性を介護する比率は少ないものの,同性である被介護者を介護する時の負担感やストレスが高い.
⑯ 年齢が若いほど,ストレスに対する対処能力は低い傾向がある．つまり介護からのストレスを受けやすい.
⑰ 男性家族介護者の約 8 割が介護者会に行きたくない理由として，苦労話しを共有しても仕方がないという考え方が背景にある.

(4)介護負担の軽減,虐待防止支援プログラムを開発する上で必要なこと

介護負担の軽減,虐待防止支援プログラムを開発する上で必要なことは次の通りである.

① 男性が介護することに張り詰め,頑張りすぎないような支援が必要である.
② 介護度の高い被介護者を介護している場合は,特に介護者自身のための時間が確保できるような支援が重要である.
③ 適度な睡眠時間や趣味があれば介護負担感を減少させる傾向があり,休息や気晴らしの時間を確保することが大切である.
④ 年齢が若く,同性を介護している男性家族介護者に対しては,ストレス対処能力が低い傾向があるため,特に支援を充実させる必要がある.
⑤ 男性は,介護を自分以外の人に任せたり,大変さや困ったことを他人に知られたくなかったりする傾向が女性に比べ高く,介護を仕事のように熱心に行う傾向があることに配慮した支援が必要である.
⑥ 趣味を楽しむ時間の確保や睡眠時間が確保できることで,負担感やストレスの軽減が見込

まれるため,そのことも考慮した支援体制を充実させることも重要である.

⑦ 年齢が若い,特に息子が母親の介護を行うとき,これまでの人生における生活体験,仕事のことも考慮し,本人の負担感,ストレスの軽減方法についての検討をして支援する必要がある.

⑧ 介護を継続できる支援の１つとして介護者会が有効に活用されるためには, 参加することのメリットを周知する必要がある.

今後は,個別事例に対する具体的な対策を検討するとともに,質的調査,量的調査の両側面から一般化できる対策について検討していくことが,男性家族介護者の負担感の軽減,ストレス緩和,虐待防止につながると考えられる.

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計0件

〔学会発表〕　計10件（うち招待講演　0件／うち国際学会　5件）

１．発表者名 植村小夜子
２．発表標題 Factors influencing stress coping ability of male family caregivers
３．学会等名 12.The 6 International Nursing Research Conference of World Academy of Nursing Science（国際学会）
４．発表年 2020年

１．発表者名 植村小夜子
２．発表標題 在宅で介護している家族介護者の介護状況と介護への認識ー性別による違いー
３．学会等名 日本看護科学学会
４．発表年 2018年

１．発表者名 植村小夜子
２．発表標題 Care status and recognition of family caregivers at home in Japan
３．学会等名 EAFONS（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 植村小夜子
２．発表標題 認知症高齢者を支える家族の性別による介護負担感とストレス対処能力の特徴
３．学会等名 第32回国際アルツハイマー病協会国際会議（国際学会）
４．発表年 2017年

１．発表者名 植村小夜子
２．発表標題 在宅で介護している女性家族介護者の特徴
３．学会等名 日本看護研究学会　第43回学術集会（名古屋）
４．発表年 2017年

１．発表者名 植村小夜子
２．発表標題 Characteristics of the gender of family caregiver’s caregiver burden and stress coping skills
３．学会等名 TNMC & WANS International Nursing Research Conference 2017（国際学会）
４．発表年 2017年

１．発表者名 植村小夜子
２．発表標題 在宅で介護している息子家族介護者の特徴
３．学会等名 第37回日本看護科学学会学術集会（仙台）
４．発表年 2017年

１．発表者名 Sayoko UEMURA
２．発表標題 Gender Comparison of Sense of Care Burden, Capacity to Deal with Stress in Family Caregivers Who Take Care of Older Adults with Dementia in Japan
３．学会等名 第32回国際アルツハイマー病協会国際会議（国際学会）
４．発表年 2017年

１．発表者名 關戸啓子
２．発表標題 在宅で高齢者を介護する介護者の負担についての文献検討
３．学会等名 第24回日本ホスピス・在宅ケア研究会
４．発表年 2017年

１．発表者名 植村小夜子
２．発表標題 在宅で介護している女性家族介護者の特徴
３．学会等名 日本看護研究学会
４．発表年 2017年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	堤　かおり (TSUTSUMI KAORI) (20327480)	園田学園女子大学・人間健康学部・教授 (34516)	
研究分担者	関戸　啓子 (SEKIDO KEIKO) (90226647)	京都府立医科大学・医学部・教授 (24303)	